

潜戸谷遺跡

能義第一地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2000年3月

島根県松江農林振興センター
安来市教育委員会



潜戸谷遺跡全景（南から）

例　　言

1. 本書は島根県松江農林振興センターが、安来市沢町字潜戸谷215番地2他で実施した能義第一地区県営担い手育成基盤整備事業に伴い、平成10年度から11年度にかけて事前に安来市教育委員会が実施した埋蔵文化財（潜戸谷遺跡）発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、安来市が島根県松江農林振興センターの委託金を得て実施したものである。
3. 現地調査は以下のとおり実施した。

（試掘調査）平成10年11月26日～12月17日

（潜戸谷遺跡）平成11年 7月15日～ 8月15日

4. 発掘調査組織は以下のとおりである。

委託者	島根県松江農林振興センター	所長	景山 孝征
受託者	安来市	安来市長	島田 二郎
主　体　者	安来市教育委員会	教育長	市川 博史
（試掘調査）事務局	安来市教育委員会文化振興課	課長	成相 二郎
		文化係長	廣江奈智雄
調　査　員		文化係主事	水口 晶郎
（潜戸谷遺跡）事務局	安来市教育委員会文化振興課	課長	成相 二郎
		文化係長	武上 巧
調　査　員		文化係主事→主任主事	
		金山 尚志	
		文化係主事	水口 晶郎
		文化係主事	大塚 光

整理作業員 泉あかね、中山和美、上山直志

5. 調査の実施にあたっては、以下の方々の指導および助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。（敬省略）

守岡正司（島根県教育厅文化財課）、中川 寧（島根県埋蔵文化財調査センター）、
岩橋孝典（同）、三宅博士（安来市教育委員会）、永見 英（同）

6. 本書で使用した造構略記号は次の通りである。

S B……… 掘立柱建物跡 S A……… 棚列跡 Pit……… 柱穴
S X……… 性格不明造構 S K……… 土坑

7. 本書の挿図中の方位は、調査時の磁北であり、真北に対し約7°西偏、平面直角座標（Ⅲ系）の方眼北に対し約8°西偏する。
8. 報告書で記載された遺物・図面・写真等は、すべて安来市教育委員会で保管している。
9. 付編の潜戸谷遺跡出土鉄滓の分析は、和鋼博物館副館長村川義行氏から玉墳を賜った。
10. 本書の編集・執筆は金山・水口が行った。執筆分担は次に示した。

本文目次

第1章	調査に至る経緯と経過	(水口)	1
第2章	周辺の歴史的環境	(水口)	2
第3章	試掘調査の概要	(水口)	6
第4章	溝戸谷遺跡の調査	(金山)	12
付 編	溝戸谷遺跡出土鉄滓の分析 (和銅博物館 村川義行)		20

図 版

挿図目次

第1図	周辺的主要遺跡位置図 ($S = 1/20, 000$)
第2図	試掘調査トレンチ位置図 ($S = 1/8, 000$)
第3図	試掘調査トレンチ断面模式図1 ($S = 1/60$)
第4図	試掘調査トレンチ断面模式図2 ($S = 1/60$)
第5図	T7トレンチ断面図 ($S = 1/60$)
第6図	試掘調査出土遺物実測図 ($S = 1/3$)
第7図	調査区配置図 ($S = 1/300$)
第8図	完掘状況図 ($S = 1/150$)
第9図	構造物分布案 ($S = 1/150$)
第10図	SA01・SA02実測図 ($S = 1/60$)
第11図	SB01実測図 ($S = 1/60$)
第12図	出土遺物実測図 ($S = 1/3$)
第13図	SK02実測図 ($S = 1/20$)
第14図	鉄滓実測図 ($S = 1/2$)

第1章 調査に至る経緯と経過

島根県松江農林振興センターでは、平成8年度から能義第一地区県営担い手育成基盤整備事業として、安来市沢町周辺の水田地約49haを5ヶ年計画で圃場整備を行うこととなった。

昭和62年2月7日付で市経済部耕地課から埋蔵文化財分布調査依頼を受け、再度平成7年8月23日付で分布調査の依頼を受けた。計画地は広範囲に広がっており、事業計画地内には周知の遺跡が含まれていることや水田下に未発見の遺跡が内包されている可能性があることから試掘調査が必要であると回答し、細かいことについては全体計画の詳細が決定してからということとなった。

平成9年4月に耕地課と協議した結果、試掘調査の必要な事業区域は平成11年度に造成を予定していることから、試掘調査は平成10年度に行うこととなった。この事業区域内に文化庁選定歴史の道百選「広瀬清水街道」が所在したが、この時点ではこの道は削平せず抜幅のみであったので問題は起らなかった。

平成9年10月に試掘調査が必要な事業区域の全体計画が決まり、島根県松江農林振興センターから試掘調査について協議があった。協議の中で示された計画図では、当初道の抜幅のみであった「広瀬清水街道」が削平され、南側に約10m移動することとなっていた。対応に苦慮し、県教委を通じて文化庁にも問い合わせてみた。その結果、どうしても設計変更できないことや少し南側にずれるが遺自体は通れることなどから、道を削平することをやむを得ず了承した。それと同時に当初試掘調査を20箇所予定していたが、このことについて島根県松江農林振興センターから、この事業が地元負担もあることなどを考慮して試掘調査箇所を減らして欲しいとの強い要望を受けた。このことを受け、やむを得なく試掘調査箇所を減らし、全部で15箇所とした。この減らした試掘調査箇所の中に、近世遺跡で現在は水田の畦道である前述の「広瀬清水街道」も含まれることとなり、このことが後日問題を引き起こすこととなった。

協議がまとまり、平成10年10月9日付で試掘調査依頼を受け、同年11月20日付で島根県松江農林振興センターと試掘調査について委託契約を締結し、同年11月26日から12月17日にかけて試掘調査を行うこととなった。調査期間中に作業道を付けるため削平される箇所があることが判明したことや周知の遺跡「潜戸山遺跡」の部分を精査することとなったので最終的には19箇所試掘調査を行うこととなった。調査の結果、低丘陵先端部とその丘陵裾の水田下から造構が検出され「溝戸谷遺跡」の存在が明らかとなった。

この調査結果を受け、島根県松江農林振興センターと協議した結果、翌年に削平が造構まで及ばず水田下に保存されることになる部分を除き、本調査を実施することとなった。平成11年4月28日付で発掘調査依頼を受け、同年7月7日付で委託契約を締結し、7月15日から発掘調査を実施した。調査の結果、複数の掘立柱建物跡等を検出し、8月15日にすべての調査を終了した。

本調査を実施する前の平成11年6月に地元研究者より、前述の「広瀬清水街道」が削平されているとの強い抗議を受けた。新聞報道があったことや、その時期に「清水広瀬街道」について市内でシンポジウムも開催されたことなどもあって、文化財サイドも混乱することもあり、近世遺跡について、その取り扱いを明確に決める必要性を強く感じる結果となった。

第2章 周辺の歴史的環境

潜戸谷遺跡と試掘調査地は、島根県安来市沢町字潜戸谷他に所在し、安来市のほぼ中央部に広がる安来平野の南縁の低丘陵上やその縁辺部に位置する。安来平野は県内でも有数の穀倉地帯で、中国山地に源を発し南流して中海にそそぐ飯梨川・伯太川、そして安来市南部に源流とする吉田川の沖積作用によって広い平野が形成されている。現在の中海の海岸線は北側に移動しているが、これは近世のたたら製鉄による鉄穴流しによる膨大な土砂によるものと考えられ、古代においては中海が現在の安来平野に向けて大きく湾入している状況も推測される。このことは、奈良時代に編纂された「出雲国風土記」に、現在の国道9号線の北にある飯島権現のある山が「飯島」として記載されていることや、JR山陰本線の南側にある中世の山城である武嶺山城跡が、当時は島であったと考えられることなどから伺うことができる。

今回の調査地は、独松山（標高320.6m）から南方向に派生するいくつもの低丘陵の縁辺部やその低丘陵に挟まれた狭い谷部に位置し、その周辺には多数の遺跡が内包されている。以下、本遺跡が所在する安来市能義地区を中心に周辺の遺跡を時代を追って紹介したい。

<旧石器・縄文時代>

安来平野周辺は、県内でも有数の遺跡分布密度が高い地域であるが、縄文時代以前の遺跡はほとんど発見されていない。このことはこれまでただ単に調査例がなかったのか、または前述の近世の鉄穴流しによる多量の土砂で、当時の遺跡が地下に埋められたためとも考えられる。

旧石器時代の遺跡として飯生町の意多岐神社境内から出土したと伝えられる、撒入品の可能性が高い石器が挙げられる。⁽¹⁾

縄文時代の遺構は検出されていないが、標高約7mの丘陵突端部に位置する沢町越石遺跡で、⁽²⁾晩期の突堤文土器が弥生時代前期の壺・甕と共に出土している。

<弥生時代>

前述の越石遺跡の前期の土器から同地区の農耕社会の成立期の様相を垣間見ることができるが詳しい様相は不明と言わざるを得ない。⁽³⁾ 続く中期の遺跡も沢町潜戸山遺跡で土器が数点出土しているに過ぎずその他の安来平野の地域と同様、後期以前の遺跡の確認例は少ない。

後期になると遺跡の検出例が格段と増加し、特に墳墓遺跡の確認例が増加する。なかでも沢町鍵尾遺跡は学史的に著名である。1962～63年と1970年に調査された同遺跡は、調査区をA・B区に分けられ、そのうちA区では貼石を持つ墳丘墓が検出されている。丘陵を15×12mの方形台状に削りだしており、丘陵基底部は尾根をカットして区画している。中には18基の墓壙が検出され、このうち5号土壙墓上出土の土器群は当地域の基準資料の一つとなっている。集落跡では、前述の安来平野では集落跡調査第1号となった潜戸山遺跡や堅穴式住居跡が検出された利弘町小林遺跡等があげられる。⁽⁴⁾

<古墳時代>

同地区の独松山から伸びる低丘陵上もしくはその斜面のほとんどすべてに古墳・横穴墓が築かれるといつても過言ではないほど、当地区の古墳の分布密度は濃い。なかでも飯梨川左岸沿いの低丘陵に築かれた矢田山古墳群は、現在確認されているだけでも古墳107基・横穴墓57基あり、県内でも最大規模の古墳群の一つとして著名である。前期の堅穴式石室を持つ方墳から、前方後円墳6基に、後

期の石棺を内蔵する横穴墓まで、古墳時代前期から後期にかけて連続して築造されている。

古墳時代前期には、前述の堅穴式石棺を持つ矢田古墳群の谷支群1・7号墳が挙げられる。墳形は方墳で 2.5×2.1 mを測り、葺石を持っている。堅穴式石棺は墳丘のほぼ中央に位置し、主軸は墳丘の東西の向きにほぼ等しく規模は長さ4.3mを測る。

中期の古墳として飯生町今若井1号墳が挙げられる。墳形は円墳で、直径は2.9mを測る。主体部は石棺で、出土品として古鏡1・刀3・鉄鏃若干・勾玉3・管玉28が出土したと伝えられているが、現在では散逸している。

後期の前半期の調査が実施された古墳として、能義町能義神社奥ノ院7号墳が挙げられる。直径1.7mの円墳で円筒埴輪・象形埴輪・須恵器などが出土しており、6世紀前半の築造と推定される。後期後半には横穴墓が多数築造される。利弘町西宮谷横穴墓群のように前方後円墳を持つものをはじめ、矢田古墳群や鳥越横穴墓群など墳丘をもつ横穴墓も少なくない。また、矢田古墳群や島木横穴墓のように石棺を内蔵し、特筆すべき副葬品を持つ横穴墓も所在する。古墳時代の集落跡として能義遺跡等が挙げられる。

＜歴史時代＞

官衙関係では、沢町舍人郷正倉推定地が挙げれる。3間×1間の掘立柱建物跡が検出され、このうち桁行が1間なのは県道新設の際、一部消滅したものと考えられている。調査の際、この建物跡の周辺および柱穴から炭化米が出土していることから、「出雲国風土記」記載の舍人郷正倉に伴う建物の一部ではないかと推測されている。

寺院関係では、「出雲国風土記」に記載された出雲地方最古の仏教寺院とされる野方町の教吳寺跡が挙げられる。塔の心礎が、現在神藏神社の小祠の台石に使われている。1984・1985年に、塔心礎が所在する周辺の確認調査が実施されたが、明確な造構を確認することができなかった。

しかし、近年地元の方から同調査地の南方の谷で農道を造る際、礎石が見つかったとの教示を受けた。この谷の奥は「コ」の字状を呈し、人工的に加工された様にも見受けられ、また谷の囲む南方の丘陵に「大門」という字名が残っていることなどから、教吳寺跡の新たな推定地として注目される。また今回の調査地周辺は、古市遺跡など布目瓦の出土が散見される。

註

- (1) 丹羽野 祐「島根県における旧石器時代研究の現状と課題—宍道湖周辺地域を中心に—」『島根考古学会誌』第8集 1991
- (2) 東森市良「安来市沢町越石遺跡出土の土器」「安来市内遺跡分布調査概報Ⅱ—(宇賀荘・島田・安来地区)…」安来市教育委員会 1989
- (3) 近藤 正「瀬戸山遺跡」「安来市の遺跡調査報告」第1集 1980
- (4) 山本 清「安来市籠尾遺跡調査報告」1965
- (5) 1987年、安来市教育委員会試掘調査。
- (6) 安来市教育委員会「安来市内遺跡分布調査報告書」1991
- (7) 註7と同じ。
- (8) 山本 清「山陰の石棺について」「出雲の古代文化」六美出版 1989
- (9) 安来市教育委員会「能義神社奥ノ院7号墳現地説明会資料」1987
- (10) 山陰横穴墓研究会「第7回山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓—その型式・変遷・地域性一」1997

(11) 内田一才「能義遺跡」『安来市の遺跡調査報告』第1集 1980

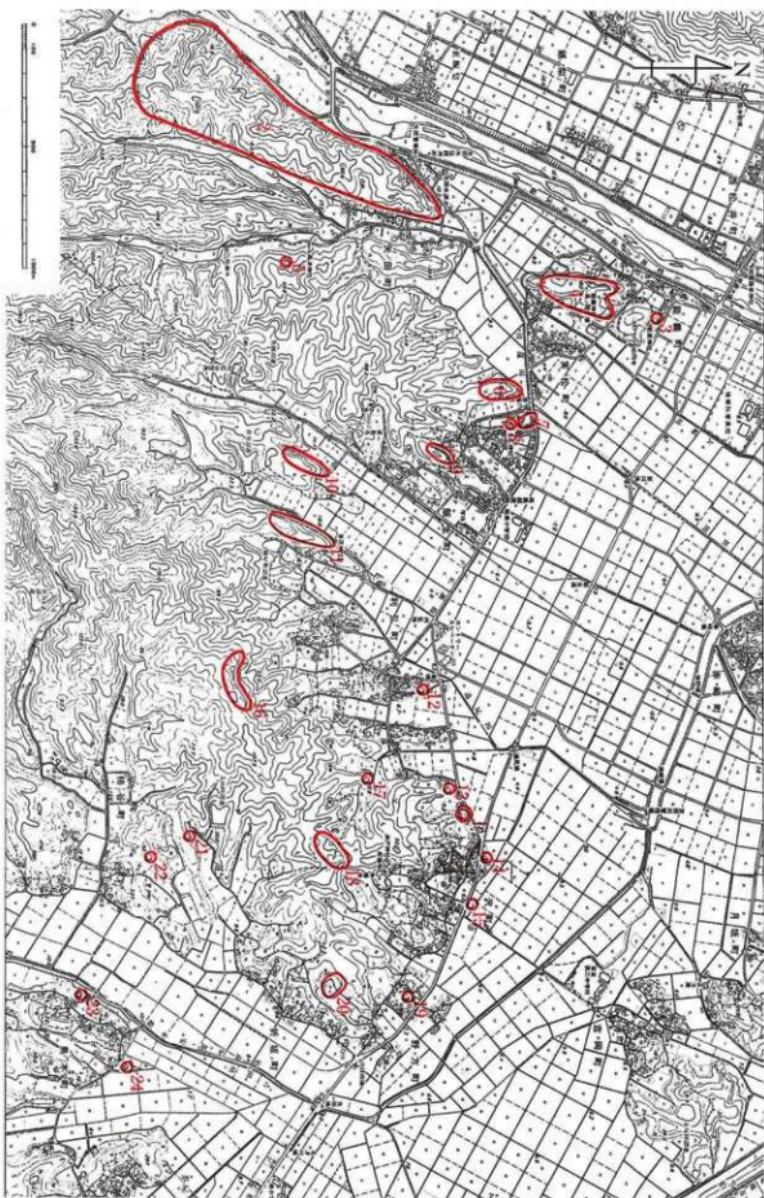
(12) 1980年、安来市教育委員会調査。

(13) 安来市教育委員会『教吳寺』1985

安来市教育委員会『教吳寺2』1986

(14) 安来市教育委員会『古市遺跡』1986

番号	遺跡名	内 容	概 要
1	瀬戸谷遺跡	集落跡	本書
2	矢田古墳群	古墳群・横穴墓群	古墳107基・横穴墓57穴、前方後円墳6基
3	能義遺跡	集落跡	堅穴式住居跡、弥生土器、上師器
4	能義神社奥ノ院古墳群	古墳群	12基、1号墳・円墳(3.5m)、3号墳・円墳(2.3m)
5	長江山横穴墓	古墳・横穴墓	古墳は後背墳丘
6	実松八幡表横穴墓群	横穴墓群	6穴、家形石棺?
7	意多伎神社古墳群	古墳群	3基、前方後円墳?
8	伝出石器出土地		尖頭器4、剥片1、石斧1
9	今若崎古墳群	古墳群	1号墳・円墳(2.9m)、2号墳・前方後円墳(1.9m)
10	えぐり谷古墳群	古墳群・横穴墓群	古墳16基(横穴墓の後背墳丘含む)、横穴墓20穴以上
11	西宮谷横穴墓群	古墳群・横穴墓群	前方後円墳(横穴墓の後背墳丘)、横穴墓7穴
12	小林遺跡	集落跡	堅穴式住居跡2棟以上、弥生土器、須恵器
13	瀬戸山遺跡	集落跡	堅穴式住居跡、弥生土器
14	今人郷正倉推定地	正倉跡	掘立柱建物跡、焼米
15	越石遺跡	散布地	縄文土器(晚期)・弥生土器(前期)
16	鳥越古墳群	古墳群・横穴墓群	古墳6基(横穴墓の後背墳丘含む)、横穴墓3穴、前方後円墳
17	金振谷横穴墓群	古墳・横穴墓群	古墳1基(円墳・横穴墓の後背墳丘)、横穴墓3穴
18	鍵尾土壤墓群	墳丘墓	弥生墳丘墓、貼石・弥生土器
19	教吳寺跡	寺院跡	風土記載教吳寺跡、心礎、軒瓦
20	礎石出土地		礎石出土、教吳寺周辺遺跡?
21	奥山田古墳群	古墳群・横穴墓群	前方後円墳(2.4m)、横穴墓3穴
22	片ひら山古墳群	古墳群	2基、1号墳(前方後円墳・2.5m)
23	鳥木横穴墓	横穴墓	家形石棺、眉庇付竈残欠、馬具・銀装土原大刀
24	占市遺跡	散布地	布目瓦・弥生土器



第1図 周辺の主要遺跡位置図 ($S = 1 / 20,000$)

第3章 試掘調査の概要

今回の調査範囲は、県内でも有数の穀倉地帯である安来平野の南端部にあたり、南から伸びるいくつも低丘陵に挟まれた比較的小規模な谷部もしくはその縁辺部にある。調査地の現状は、水田・畑地であった。平成10年度に実施した試掘調査箇所は計19箇所である。周知の遺跡である潜戸山遺跡⁽¹⁾に遺跡の範囲確認のために3箇所、その他に地形等を考慮して埋蔵文化財が包蔵されている可能性がある場所に16箇所トレンチを設定した。このうち、遺構が検出されたT7・T15を周辺の小字名から潜戸山遺跡とし、このうち現状保存が困難なT15周辺を平成11年度に本調査を実施することとなった（第4章を参照）。本章では、この本調査を実施したT15を除き、18箇所の試掘調査の概要を報告する。

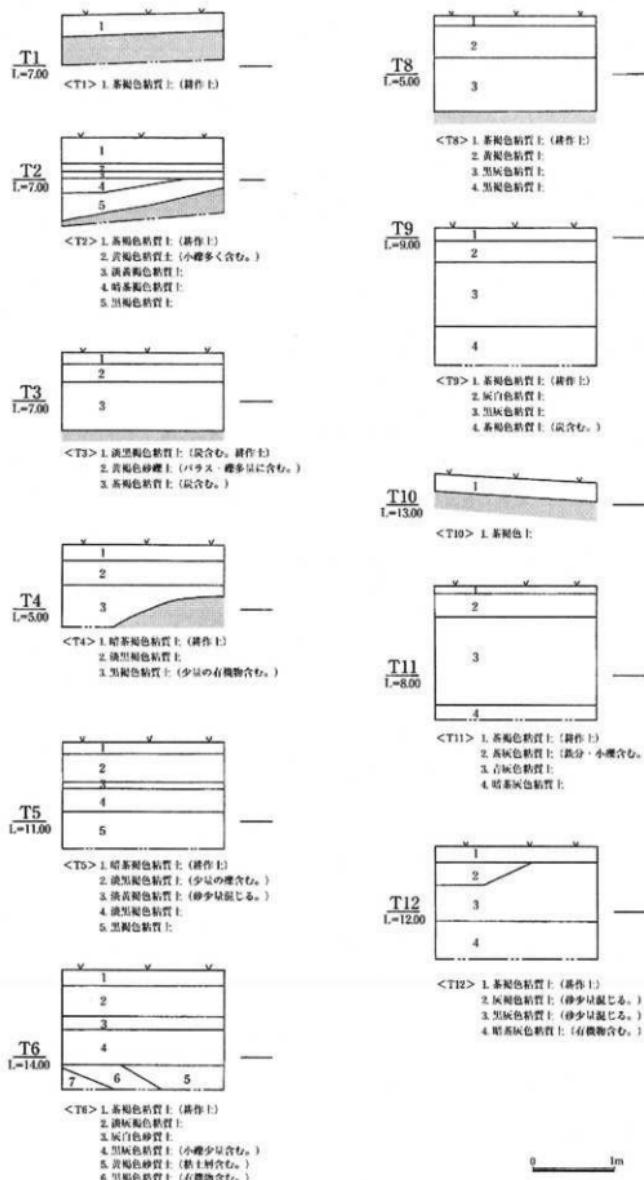
< T1~3 >

調査の概要（第3図） 北側に向けて伸びる低丘陵の西側に広がる標高約7mの微高地にトレチを3箇所設定した。調査前状況は畑である。この微高地の東側は大きく削平されており、この削平された場所を含む丘陵全体が潜戸山遺跡で、1961年に発掘調査が実施され弥生時代の竪穴式住居跡等が検出されている。本調査地も同遺跡に含まれているものと考えられていた。そこで、遺跡の範囲や遺構の残存状態を確認するために、3箇所トレチを設定した。第3図にT1が西壁、T2・T3が北壁のトレチ断面模式図を示している。

調査の結果、いずれも遺構は検出されず、のことから本調査地に遺跡は広がっていない、もしくは既に削平されたものとの結論に達した。



第2図 試掘調査トレチ位置図 (S = 1 / 8, 000)



第3図 試掘調査トレンチ断面模式図1 (S = 1 / 60)

出土遺物（第6図1） T2では、須恵器・土師器片が数点出土した。1は須恵器坏身で、復元口径14cmを測る。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部を屈曲させる。時期は高広編年IV A～IV B期と考えられる。その他の出土遺物として須恵器壺片などが出ている。T1・T3からは遺物は出土しなかった。

<T4～T6>

調査の概要（第3図） 前述のT1～T3の場所が谷の出口となる、調査範囲中最も西側の谷の標高約5m～14mの丘陵麓にトレントを3箇所設定した。調査前現状は水田もしくは休耕田である。第3図にT4が北壁、T5が東壁、T6が北壁のトレント断面模式図を示している。

調査の結果、いずれも遺構は検出されなかった。

出土遺物（第6図2～8） T4では埴輪・土師器・須恵器片を検出した。いずれも3層中からの出土である。2・3は円筒埴輪である。2は胴部の破片で、スカシは円形でタガ高8mmを測る。胎土は須恵質で外面1次調整のみ施してある。3は底部の破片で、底部調整を行い底端部をカットしている。調整は内外面とも丁重に2次調整と考えられるナメハケを上から下方向に施している。時期は出雲の円筒埴輪編年3期新相から4期にかけてと考えられる。4・5は須恵器である。4は蓋で復元口径17.6cmを測り、口縁端部は屈曲させ内部に返りが付かないタイプのものである。時期は高広編年IV A～IV B期と考えられる。5は小型の壺の口縁部である。6・7は土師器である。6は坏で足高台を持つものである。時期は12～13世紀と考えられる。7は坏身で、底部には回転糸切り痕が確認される。その他に、須恵器・土師器壺片・近世陶磁器が出土している。T5では須恵器・土師器片・近世陶磁器を検出した。8は高台のつく坏身で復元高台径10.4cmを測る。摩滅が著しく調整等は不明である。T6からは遺物は出土しなかった。

<T7～T9>

調査の概要（第3図・第4図） 低丘陵にはさまれた奥行約200mほどの狭い谷部の標高約5m～14mにトレントを設定した。いずれも調査前現状は水田であった。第5図にはT7のトレント断面図、第3図にはトレントのT8が東壁、T9が南壁の断面模式図を示している。

調査の結果、T7で遺構を検出した。その断面図から2時期の遺構（掘立柱建物跡？）が所在すると判断される。このトレント周辺は事業を実施するにあたって、削平が遺構面まで届かないことから本調査は実施しなかった。T8・T9では遺構は検出されなかった。

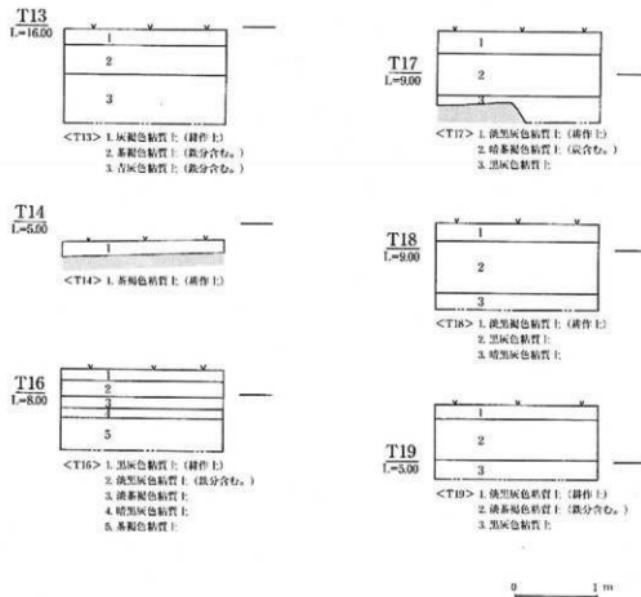
出土遺物（第6図9～13） T7からは、弥生土器・土師器・須恵器・布目瓦片を検出した。湧水が激しく、遺物を層位的に取り上げることはできなかった。9は弥生土器壺で、頸部は長く外反し、口縁部外面に櫛刷沈線を施す。時期は弥生時代後期後半の所産と考えられる。10は土師器壺で、復元口径21cmを測る。口縁部は外反し、頸部以下内面はハラケズリを行う。11は須恵器坏身で、復元底径7.2cmを測る。底部には糸切り痕が観察される。12は布目瓦で、外面は繩目压痕・内面には布目压痕が観察される。図示できなかったが、その他にも軟質の軒丸瓦の瓦当部が出土している。13は中世須恵器の壺片で、外面は大柄の格子目タタキ・内面はハケ目調整が観察される。時期は古代末から中世初頭にかけての所産と考えられる。T8からは須恵器・土師器壺片が数点出土している。

< T10 ~ T13 >

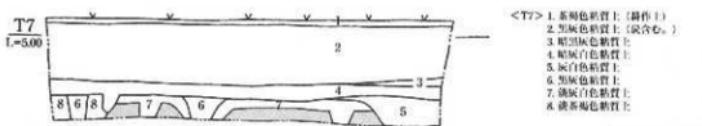
調査の概要（第3図・第4図） 調査範囲中一番東端の比較的奥行きのある谷部の標高約8~16mにトレントを設定した。調査前状況は水田もしくは休耕田であった。第3図にT10が東壁、T11が南壁、T12が西壁、第4図にT12が西壁のトレント断面模式図を示している。

調査の結果、いずれも遺構は検出されなかった。

出土遺物（第6図14・15） T11から須恵器・土師器・土製支脚・中世備前焼・近世陶磁器が出土している。すべて3層からの出土である。14は須恵器の坏身で、立ち上がりは内傾し比較的高く、残存部はすべて回転ナデ調整である。時期は山本3期の所産である。15は須恵器の高台が付く坏身で、復元高台径8cmを測る。高台は高くしっかりと踏ん張っており、外面体部には回転ヘラケズリを施してある。高台内面の切り離しの痕跡は消されている。T10・T13から須恵器壺片・近世陶磁器、T12から須恵器壺片が出土している。



第4図 試掘調査トレント断面模式図2 (S=1/60)



第5図 T7トレント断面図 (S=1/60)

< T 14 ~ T 15 >

調査の概要（第4図） この試掘トレンチは、派生する丘陵の先端部にあたり、尾根を若干下がった標高約5mの丘陵縁部に2箇所設定した。調査前状況は畠地であった。第4図は、T 14の東壁のトレンチ断面模式図を示している。

調査の結果、T 15で柱穴や溝など遺構が確認され、同トレンチのド方に隣接し遺構が確認されたT 7と併せて、周辺の小字名から潜戸谷遺跡とした。T 15周辺は遺跡の現状保存が困難であることから、平成11年度に本調査を実施した（第4章参照）。T 14は遺構は検出されず、地表面から15cmで平らな地表面を検出したことから、丘陵先端部のT 15より北側の遺構は既に削平されたものと推定される。

出土遺物 T 15は須恵器・土師器片が出土した。T 14からは遺物は出土しなかった。

< T 16 ~ T 19 >

調査の概要（第4図） 前述の潜戸谷遺跡の東側の奥行き200mほどの狭い谷部の、標高約5~9mにトレンチを4箇所設定した。調査前状況は水田であった。第4図の、T 16が西壁・T 17・T 18・T 19が南壁のトレンチ断面模式図を示している。

調査の結果、いずれも遺構は検出されなかった。

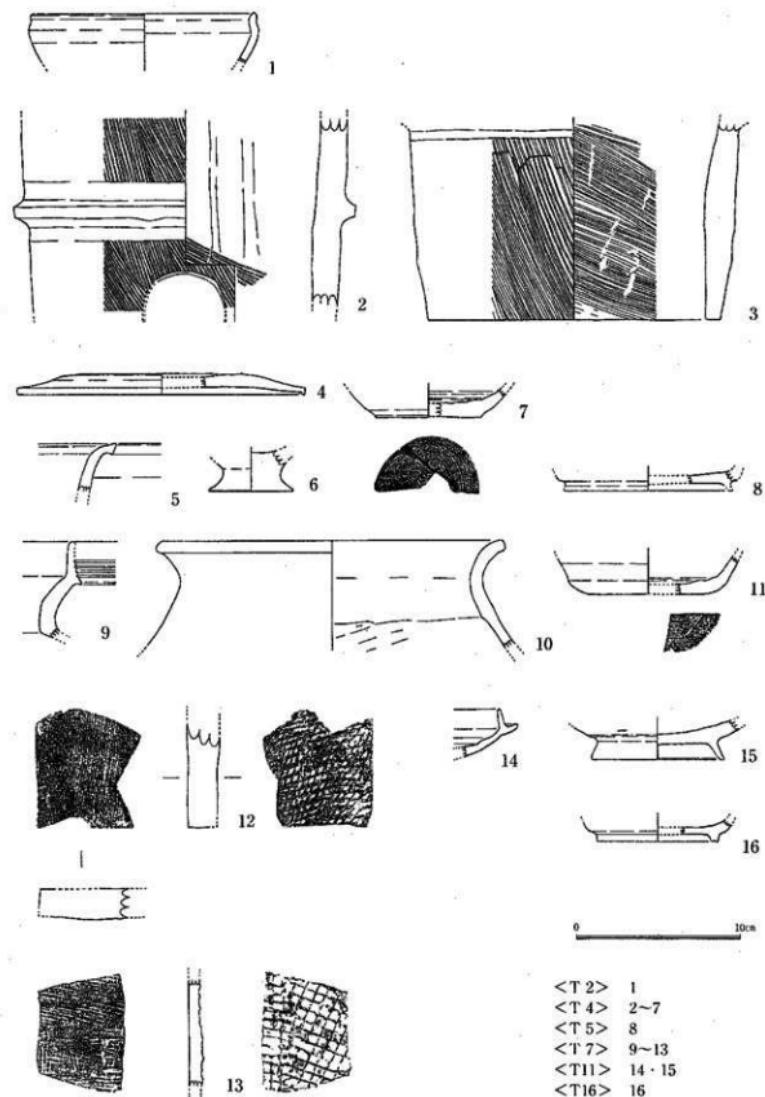
出土遺物（第6図16） T 16から須恵器・土師器片が出土した。T 16は須恵器の高台の付く壺身で、復元口径7.4cmを測る。底部に糸切り痕が確認される。T 17からは須恵器・土師器壺片が、T 18からは中世後半の時期と考えられる備前焼すり鉢の小片が、T 19からは須恵器・土師器壺片がそれぞれ出土している。

以上、試掘調査の概要である。T 1~T 3は潜戸山遺跡の範囲確認を目的に調査したが、いずれも遺構は検出されず、同遺跡の西側に遺跡が広がらないことを確認した。T 4から円筒埴輪が出土したが、前述の丘陵頂部を調査した潜戸山遺跡からも円筒埴輪が出土しており、その形態や調整方法から丘陵部に5世紀末から6世紀前半にかけての時期の古墳が所在している、もしくはしていたと考えられる。T 7・T 15からは遺構を検出し、周辺の小字名から「潜戸谷遺跡」とした。T 7はその断面図から、遺構は2時期にまたがるものと考えられる。またT 7から布目瓦が出土したが、同トレンチの東北約200mに舍人郷正倉を構成すると考えられる建物の一部が検出されており、その関係が注目される。丘陵縁部のT 15周辺は本調査を実施することとなった（第4章参照）。

今回の試掘調査では遺構が検出できたのはほんの一部であったが、遺物が出土した場所はその周囲の地形を考えると遠方からの流れこみとは考えにくく、谷を挟む丘陵上には弥生時代から中世にかけて遺跡が多数立地しているものと考えられる。

註

- (1) 近藤 正「審戸山遺跡」『安来市の遺跡調査報告』第1集 1980
- (2) 島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書--和田園地造成工事に伴う発掘調査--」1984
- (3) 垂水照彦「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学年報』第14集 1997
- (4) 山本清「山陰の須恵器」『島根大学10周年記念論集』1960



第6図 試掘調査出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

第4章 潜戸谷遺跡の調査

1 調査の経過

対象地は南北に延びるなだらかな尾根先端の西側緩斜面の裾部に位置する（第7図）。現況は畠として利用されている（図版2）。調査区の南方には3m近い高低差があり、畠の拡張により南側はかなり削られている。南北方向の搬入路予定地のため、道の形状に合わせ調査区の東西の幅は約5mで細長い形状である。調査区南端は削平される丘陵部分をまでとした。この搬入路上は事前に南北2箇所（T14・T15）を試掘調査していた。その結果、北側のT14では遺構が検出されなかったので、北端は両トレンチの中央とした。

7月15日から調査前測量図を作成し、19日から発掘調査を開始した。調査区は南北方向に長く、中央を道に分断されていたため、道部分を残すと南側をI区、北側をII区とした。最終的にはこの部分を取り除き、一体の調査区となった。また、調査が進むにつれII区北側隅に柱穴が続く可能性が強まり、北方向に拡張した。調査の結果、南北それぞれの平坦面とそこに掘り込まれた多数のピットを検出した。また覆土からは少量の土師器・須恵器・鉄滓が出土しているが、これらはほとんどII区からのものである。8月15日には発掘調査を終了した。最終的に本調査の範囲は80m²となった。

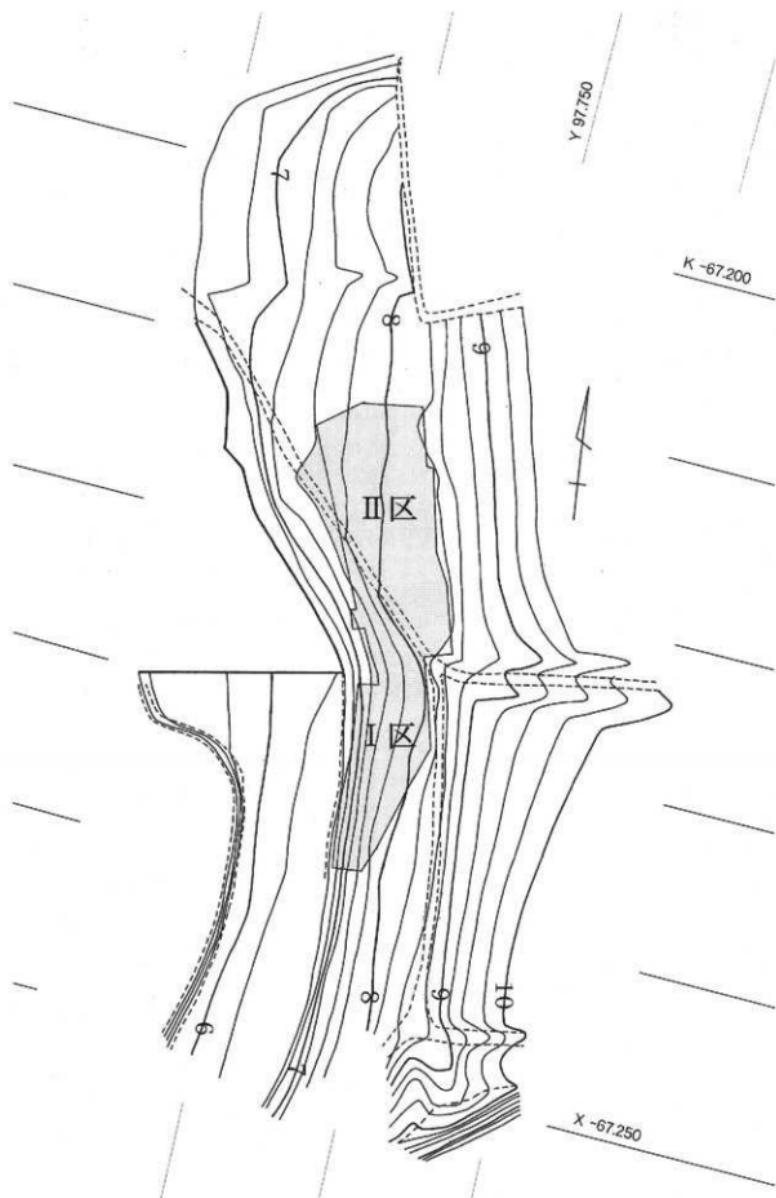
2 遺構の状況

地山は赤黄褐色の粘質土である。遺構覆土は約40～50cmの厚さで堆積していた。これらは大きく2層に分類できる。1層は暗褐色土、2層は暗黄褐色土である。全体的に炭化物を多く含んでいる。1層は表土、2層も近世の陶器が混入しているため、遺構面までほとんどの部分が擾乱されている。柱穴の覆土は暗褐色、黒みが強い暗褐色、淡褐色、それらが混ざり合ったものなどがあり、若干の遺物が出土している。

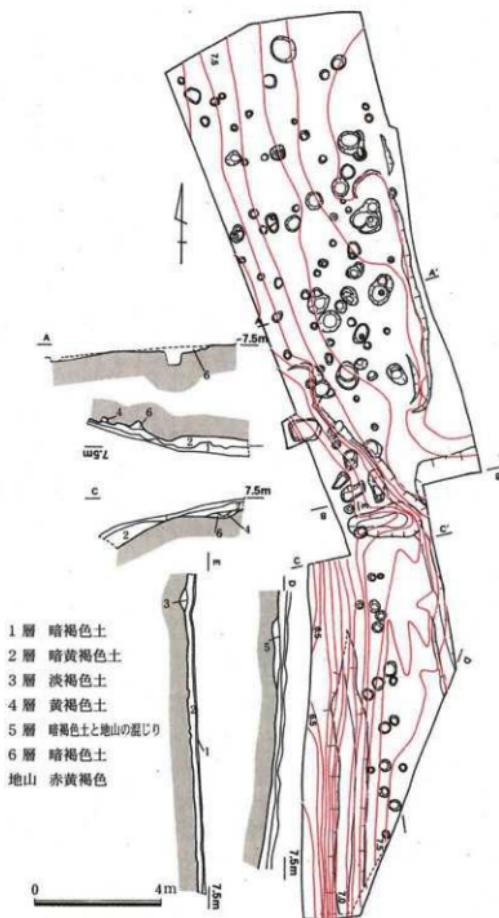
I区・II区には対応するように南北に2つの平坦面を確認した（第8図、図版3・4）。南側の平坦面は北側に比べ30cm程低くなっている。それぞれの平坦面からは多数の柱穴が検出されたが、大きさや分布に違いが見られる。遺物はほとんど北平坦面から出土している。

南平坦面は現況で幅2.5m南北に細長い平坦面である。西に下る緩斜面をL次形に削りこんで平地を造っている。平らな部分の標高は7.5mである。山（東）側端に段がついているが、この段は西上がりに緩やかに傾斜しており道として削平されたものと思われる。この平坦面からは約30穴の柱穴及び土坑を検出した。これら柱穴は平坦面の谷（西）側端に沿って南北に分布している。しかも平坦面の山側端付近には認められず、山側の立ち上がりから1.5m程の間隔を置いている。柱穴は径が小さく浅いものが多い。これらの柱穴の分布をみると、2つの軸を異にする列が認められるので、東側をSA01・西側をSA02とした。また南平坦面北側の不整形な土坑をSX01とした。

北平坦面は現況で南北12m以上、東西5m以上の広い平坦面である。平坦な地盤の標高は7.9mである。西に下る緩斜面をL次形に削りこんで平地を造っている。東側に南北に延びる溝がめぐっている。溝はL字形に西方へ折れ曲がっている。柱穴もこの溝の折れている部分を境にして北側に分布する。



第7図 調査区配置図 ($S = 1 / 300$)



第8図 完掘状況図 (S = 1 / 150)

この平坦面からは約50穴あまりの柱穴及び土坑を検出した。これら柱穴は溝で区画された内側に分布する。柱穴は径が大きく深いものが多く、溝と方位を同じくして等間隔に柱穴が並ぶ。この柱穴群をSB01とした。SB01以外にも大小の柱穴が散在している。遺物は大きく古墳時代後期から平安時代のものが認められることから、SB01以外にも重複して遺構が存在していると考えられる。SB01の北側には鉄滓が検出された土坑SK02が分布する。

II区の東南隅では落ち込みも確認しており、さらに東方向にも遺跡が広がっていることがうかがえる。

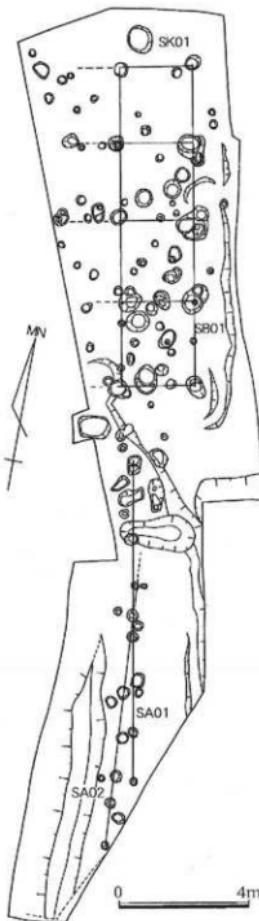
以下、それぞれの遺構について概要を記す。

SA01 (第10図、図版6) 調査区南側に位置する柱穴群である。1列なので横列としたが、西側斜面が後世の地形改変によるものであった場合、掘立柱建物であった可能性もある。柱は間隔が約1.5mで、南北6間、長さ9mを測り、さらに調査区外へ続いている可能性がある。方位はN11°WではSB01と方位を同じくする。柱穴の形状は円形の素掘りであり、径20~40cm、深さ10~50cmとばらつきがあるが、全体的に小さい印象である。遺物もほとんど検出されていないので、営まれていた時期を推定するのは困難であるが、SB01とSA01が軸を同じくしていることなどから共存していた可能性もある。

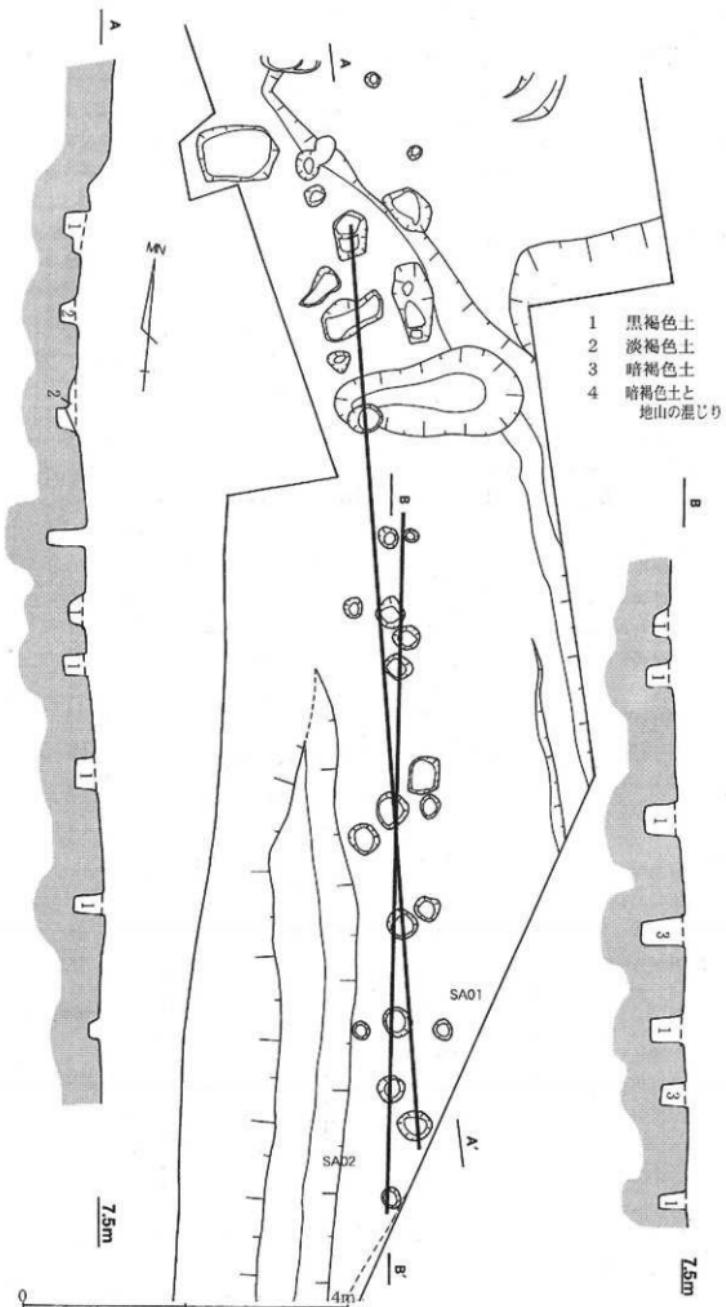
SA02 (第10図、図版6) SA01と重複するように調査区南側に位置する柱穴群である。これも1列なので横列としたが、掘立柱建物であった可能性もある。柱は間隔が約2.3mで、南北3間、長さ7mを測り、さらに調査区外へ続いている可能性がある。方位はN4°Wである。柱穴の形状は円形の素掘りであり、径20~40cm、深さ20~50cmとばらつきがあるが、全体的に小さい印象である。

SX01 (第10図) 南平坦面の北寄りに市する不整形な土坑である。覆土から17世紀後半以降の伊万里焼の磁器碗片の他、近代までの遺物が出ていることから周囲の柱穴群と併存しないものである。

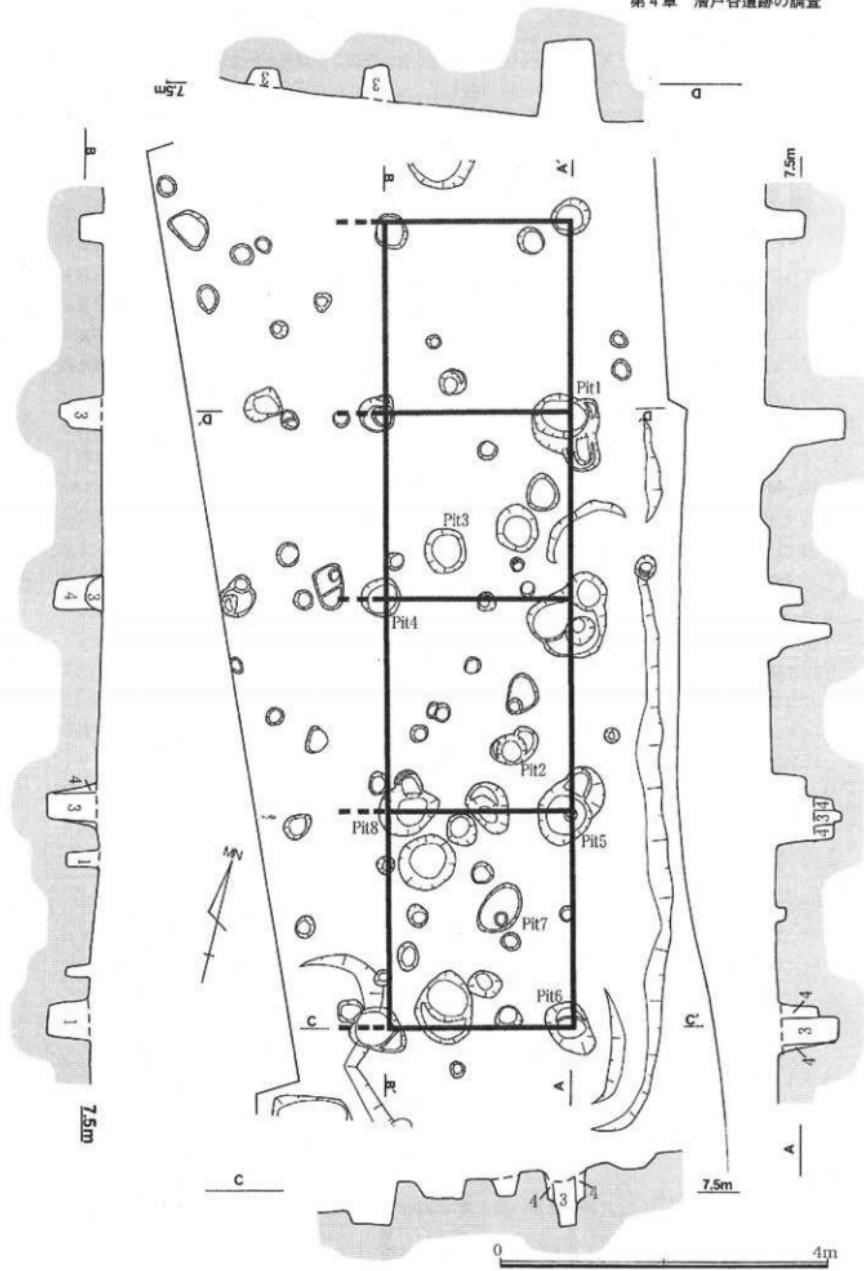
SB01 (第11図、図版5) 平坦面を造る契機となった掘立柱建物であろう。調査区東側で検出した南北方向に延びる溝は幅60cm、深さ13cmを測る。この溝は南側でL字に屈曲していることから、建物の東南隅隅を区画しているものと思われる。この溝に沿った柱穴の並びから桁行4間以上、梁行き2間以上と想定した。現状で東西2.3m以上、南北10m、面積は23m²以上となる。柱穴間隔は桁行が2.3~2.6m、梁行き2.3mです。ただし、北端の柱穴は他の柱穴に比べ、極端に浅い



第9図 構造物分布案 (S=1/150)



第10図 SA01・SA02実測図 ($S = 1/60$)

第11図 SB01実測図 ($S = 1/60$)

点及び柱穴間隔が短い点に若干の疑問が残るので、2棟の建物を混同しているかもしれない。柱穴の大きさは径50~70cm、深さ30~100cmあり、南平坦面に比べかなり大きく深い。また、柱穴の土層から柱根の径は15~20cm程度である。方位はN14°Wである。時期は断定できないがPit 1から平安時代の土器が出土していることから、この時期に築造されている可能性が高い。また、Pit 2からは古墳時代後期の土器が出土していることから、この平坦面に重複して古墳時代後期の掘立柱建物も存在している可能性がある。

3 出土遺物（第12図、図版7）

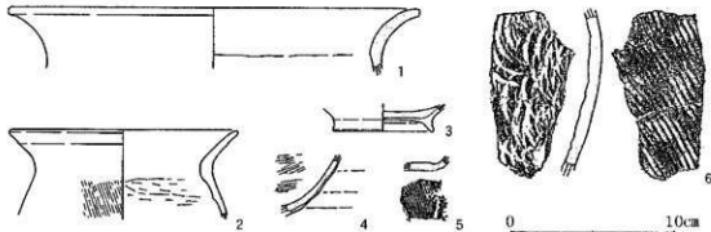
1はII区のPit 2から出土した口縁部～頸部にかけての、土師器壺の小片である。口径は推定で25.4cmである。緩やかに外反する口縁部で胴部内面は横方向のケズリ調整をしている。色調は内外面ともに明るい灰黄（YR 8/3）を呈する。外面は全体的に黒く焼けている。製作時期は古墳時代後期のものと考えられる。

2は土師器壺の口縁部～肩部にかけての、小片である。II区の柱穴から出土した。口径は推定で14.1cmである。肩が張らない形状で口縁はまっすぐ延びる。胴部外面は縱ハケ、内面は非常に粗く深い横方向のケズリ調整をしている。色調は内面がくすんだ黄赤色（6 YR 7/6）、外面は暗い灰黄（8 YR 3.8/3）を呈する。特に口縁部内面は黒みが強い。製作時期は古墳時代後期のものと考えられる。

3はII区のPit 2から出土した土師器の底部片である。台部径は6.2cmである。色調は内面が黒灰色（N-4）、外面はくすんだ赤みの黄色（10 YR 7.5/4.5）を呈する。特に内面の黒みは断面中央まで続いている。

4はII区のPit 1から出土した黒色土器底部の小片である。緩やかに内湾しながら立ち上がる。内面には横方向の丁寧なミガキ調整、外面は指ナデの稜線が明瞭に認められる。色調は内面が消灰色（N-2.5）、外面はくすんだ黄（2.5 YR 8/4）を呈する。特に内面の黒みは断面中央まで続いている。製作時期は10世紀～11世紀代で、在地で生産されていたものと考えられる。⁽²⁾

5はII区の平坦面床面から出土した須恵器の底部片である。推定口径は8cm程度である。底は糸切り技法で切断されている。底部の端は内外面とも深く窪む。色調は内外面ともに明るい灰色（5 Y

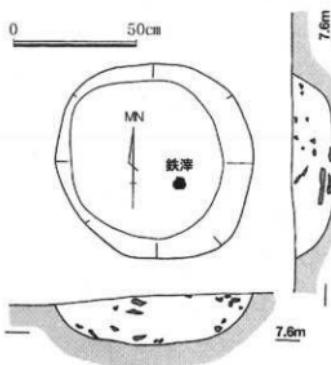


第12図 出土遺物実測図 (S = 1/3)

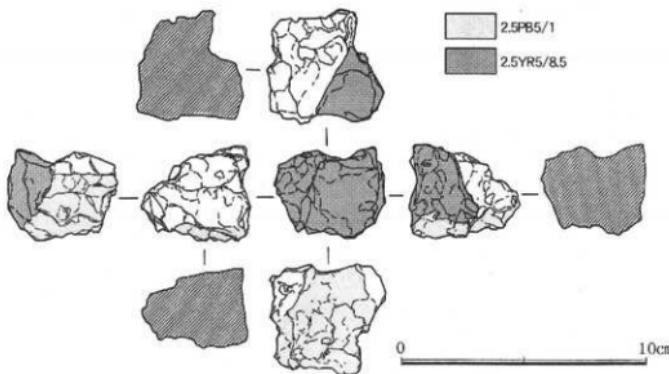
9/1) を呈する。製作時期は奈良時代以降と考えられる。

6はII区の平坦面から出土した須恵器大甌の脇部片である。外面は叩き、内面は當て具痕が認められる。色調は内面がくすんだ黄赤(5.5YR 5.5/4.5)、灰色(N-5.5)を呈する。

鉄滓はSK02内から出土した。SK02は径80cm、深さ20cmの浅いレンズ状の円形土坑である(第13図)。覆土は暗褐色土で0.5~3cmの大きさの炭化物を多く包含している。鉄滓はこの土壤の底から10cm上の高さで出土している。この土坑内の覆土はフルイと磁石により鍛造剥片の有無を調べたが、断定できるような鉄片は検出されなかった。鉄滓は5cm程度の大きさである(第14図)。ゴツゴツした面と円滑な面がある。前者は赤褐色(2.5YR 5/8.5)の部分とベージュ色(10YR 7.5/4.5)の部分がある。後者は光沢のある鉛色(2.5PB 5/1)である。赤褐色の部分は弧を描く形状をしている。非常に弱い有磁性であり、重量は約90gである。^[3]分析結果から、砂鉄を原料とした精練鍛冶滓であることがわかった。



第13図 SK02実測図(S=1/20)



第14図 鉄滓実測図(S=1/2)

4 まとめ

調査区からは2つの平坦面と多数の柱穴を検出した。柱穴の分布から柵列2列と掘立柱建物1棟以上が存在していたと推定される。また、遺構の上面が後世の改変のため築造時期は限定できないが、出土遺物から古墳時代後期から平安時代にかけて築造されたものと考えられる。

調査地は奈良時代に編纂された出雲国風土記に記載されている舍人郷正倉の推定地に近く、奈良時代において重要な地域であったことは想像に難くない。今回の調査が非常に小範囲の調査にもかかわらず、奈良時代を含め前の時期の遺構を密度高く検出したことは正倉周辺の集落の様相を探るひとつの手がかりを提示したと言えよう。今後、これらの集落の広がりや消長など究明されなければならない課題が多いことを記して、安来市沢町所在潜戸谷遺跡の事実報告としたい。

註

- (1) 島根県教育委員会守岡正司氏のご指導による。
- (2) 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター岩橋孝典氏のご指導による。
黒色土器は安来市門生町陽徳寺遺跡でまとめて出土している。(『他見津遺跡・日置遺跡・陽徳寺遺跡』 1996島根県教育委員会)
- (3) 第5章参照



作業風景

潜戸谷遺跡出土鉄滓の分析調査報告書

(財) 安米市体育文化振興財団・和鋼博物館

経緯

安来市沢町215-2字潜戸谷・潜戸谷遺跡出土品の科学分析調査結果について報告する。

潜戸谷遺跡は能義平野の南部にあたり、独松山から北側にのびる低丘陵の斜面に位置する。付近には弥生時代中期から後期にかけての集落遺跡である潜戸山遺跡や、奈良時代の舍人郷正倉推定地がある。平坦面に加工され、多数の柱穴が掘り込まれた遺構がみつかり、複数の掘立柱建物が建っていたと推定される。また、土師器片、須恵器片、磁気片、鉄滓、他の遺物が出土している。

1. 資料外観

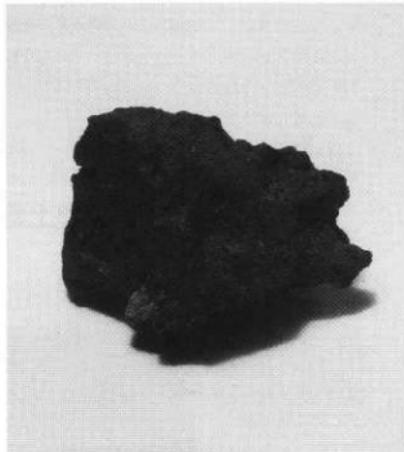
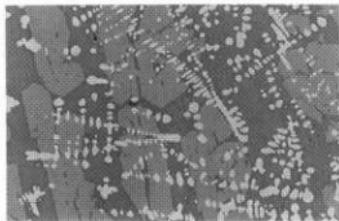


写真1 資料外観

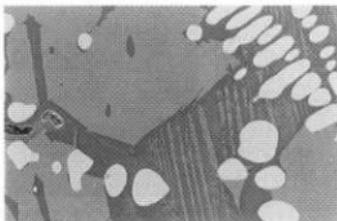
重さ：90g。赤褐色部と黒灰色部分からなる。赤褐色部は凹凸があり泥が付着し底部と思われる。黒灰色部分は平滑で光沢あり硬い感じである。以下の分析調査試料は黒灰色部分より採取した。

2. 光学顕微鏡組織観察

資料の切断面を樹脂に埋め込み後、ダイヤモンドペーストで研磨し、光学顕微鏡にて組織を観察した。



×100



×400

写真2 光学顕微鏡組織

白色ブドウ型結晶はウスタイト (FeO)、灰色の角ばった結晶はファイヤライト (Fe_2SiO_4)、黒色部は基地（ガラス質）である。

3. 化学成分分析

資料を粉碎し、化学成分分析した結果を表1に示す。このうちSは赤外線吸収法、FeO、M·Feは溶量法、その他は高周波プラズマ誘導結合型発光分光分析法（ICP発光分光分析）により分析した。

表1 化学成分分析結果 (wt%)

SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	MnO	P	S	Cu	TiO ₂	V ₂ O ₅	T·Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	M·Fe
22.36	3.70	1.27	0.33	0.24	0.048	0.030	0.01	0.63	0.07	51.72	60.36	6.03	0.28

4. SEM-EDXによる微細組織観察および局部分析

資料の切断面を樹脂に埋め込み後、ダイヤモンドベーストで研磨し、走査型電子顕微鏡にて組織観察およびEDX局部分析（エネルギー分散型X線分析）を行った。

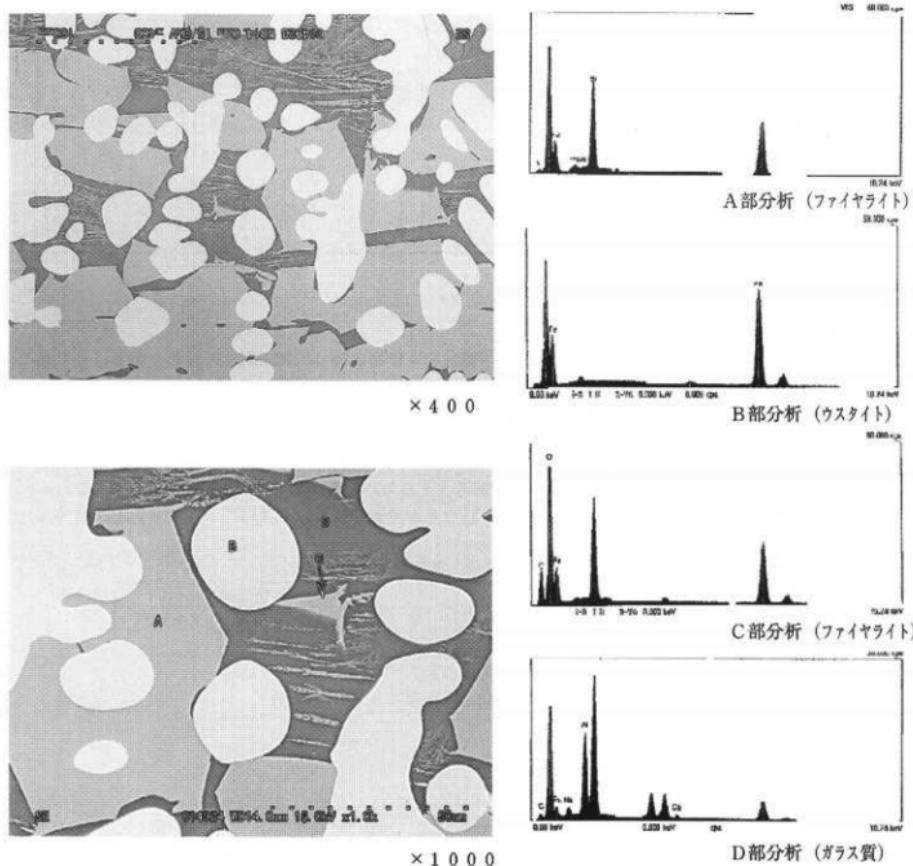


写真3 SEM観察組織とEDX局部分析

7. X線回析

粉末試料を用いたX線回析により構成結晶の同定を行った。

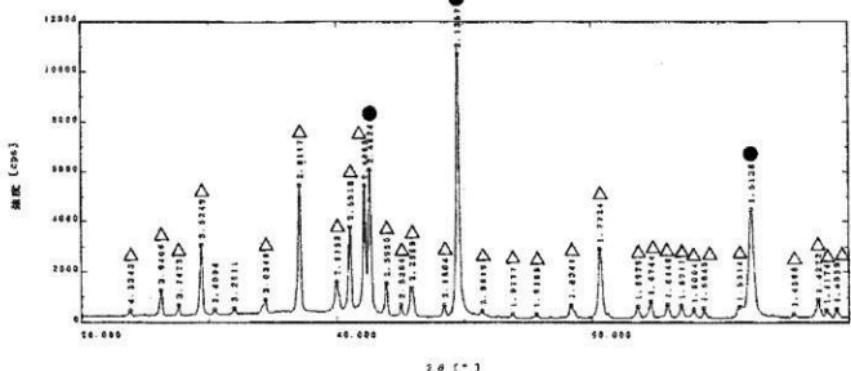
サンプル名 : 安来清水口谷〔平滑化〕方法: 加重平均
 ファイル : 和銅博物館 2407 [バックグラウンド除去]
 コメント : 安来市沢町鉄滓
 測定日 : 16-Feb-01:00 [Ka2除去]
 計測者 : dmax (ピーカーチャン)

平滑化点数 : 7

ピーク軸しきい値: 0.50
 ピーク強度しきい: 400.000

潜戸谷遺跡

●: FeO 06-0615
 △: Fe₂SiO₄ 34-0178



8. 考察

大沢正巳⁽¹⁾が調査された古墳出土鉄滓の化学組成および構成相（鉱物組成）の分類を参考にして本資料の分析結果をまとめると表2のようになる。

光学顕微鏡、SEM-EDX組織観察およびX線回析から鉄治滓の特徴的鉱物組成である白色ブドウ状のウスタイト（FeO）の発達が認められる。

また、化学分析結果より、全Fe/TiO₂は5.1、7%と比較的高く、鉄治滓の傾向を示す。一方、造滓成分も2.7、6%と比較的高く精錬が未熟であることから、大鐵治滓（精錬滓）と断定される。

製鉄の原料が砂鉄か鉱石かについては、TiO₂とVがそれぞれ0.63%、0.04%と比較的高いことから、砂鉄を原料としていると判断される。

表2 主要成分、鉱物組成まとめ

主要化学組成				鉱物組成 ^{a2}	
T·Fe	造滓成分 ^{a1}	TiO ₂	V	SEM-EDX	X線回析
51.72	27.66	0.63	0.04	F, W	F, W

*1: SiO₂+CaO+MgO+Al₂O₃

*2: F=ファイアライト(Fe₂SiO₄)、W=ウスタイト(FeO)

9. 結論

砂鉄を原料とした精錬鉄治滓である。

10. 引用文献

(1) 大沢正巳:「古代出土鉄滓からみた古代製鉄」、日本製鉄史論集、たたら研究会、昭58

以上の分析は日立金属（株）冶金研究所および（株）ハイメック中国事業所で実施した。

写 真 図 版

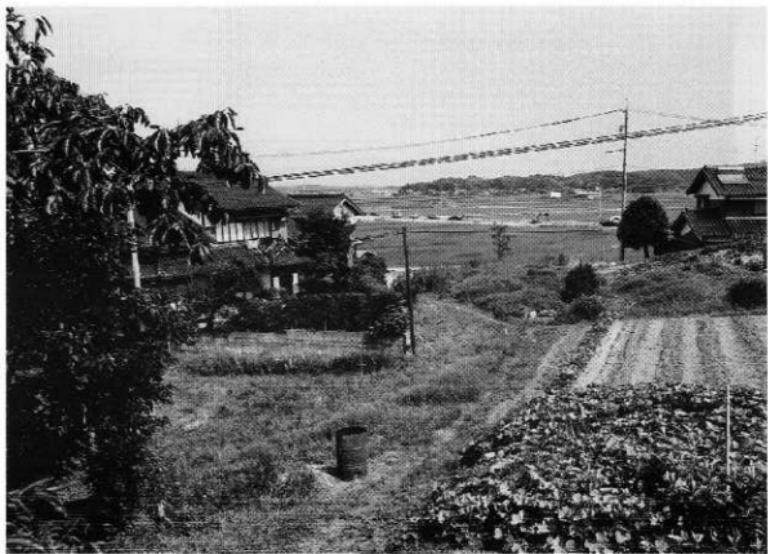
図版 1



調査遠景 (西から)



T 7 造構検出状況 (西から)



調査前（南から）

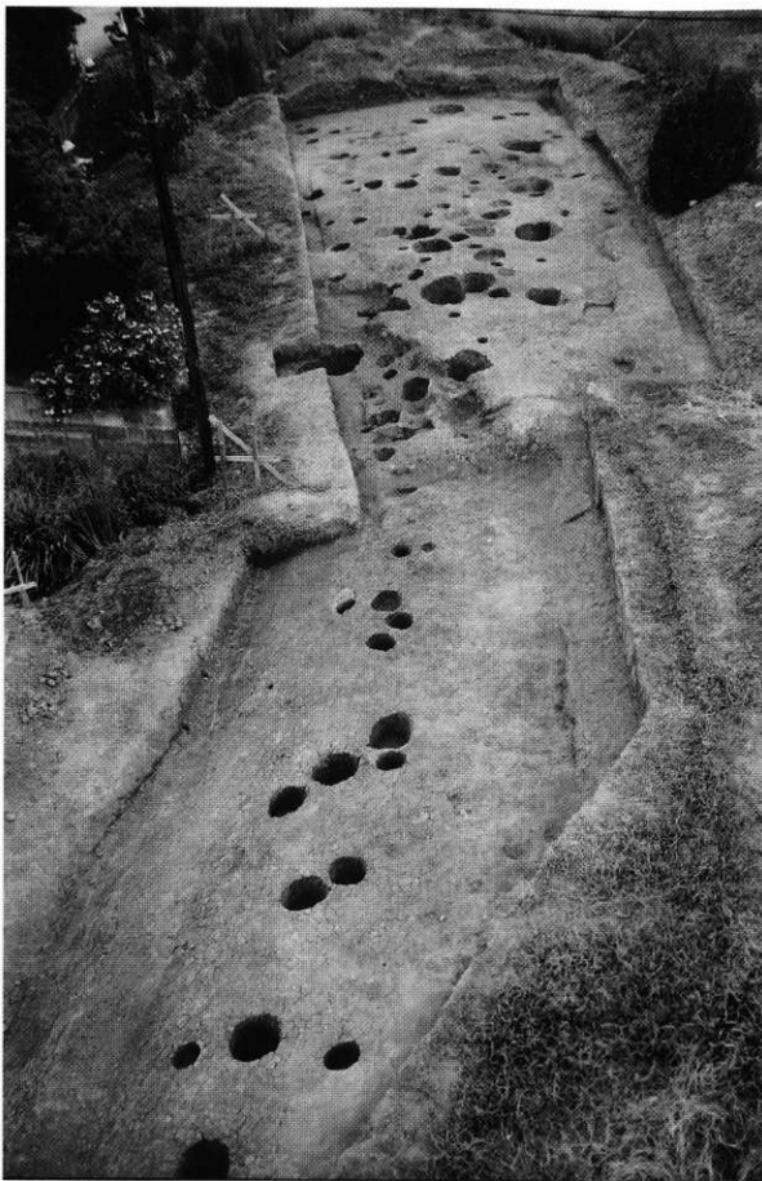


調査区遠景（西から）



舍人郷正倉推定地

図版 3



完掘状況（南から）



完掘状況（北から）

図版 5



SA01・SA02 (南から)



SB01 (南から)

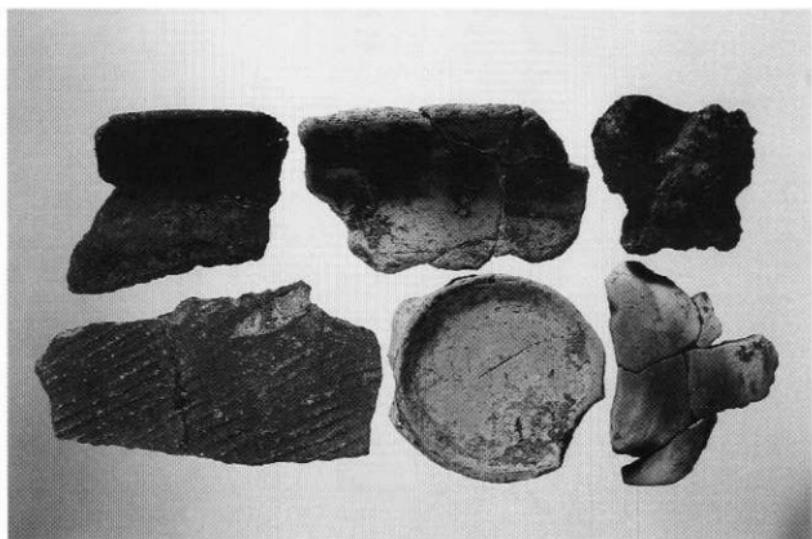


SB01 (北西から)

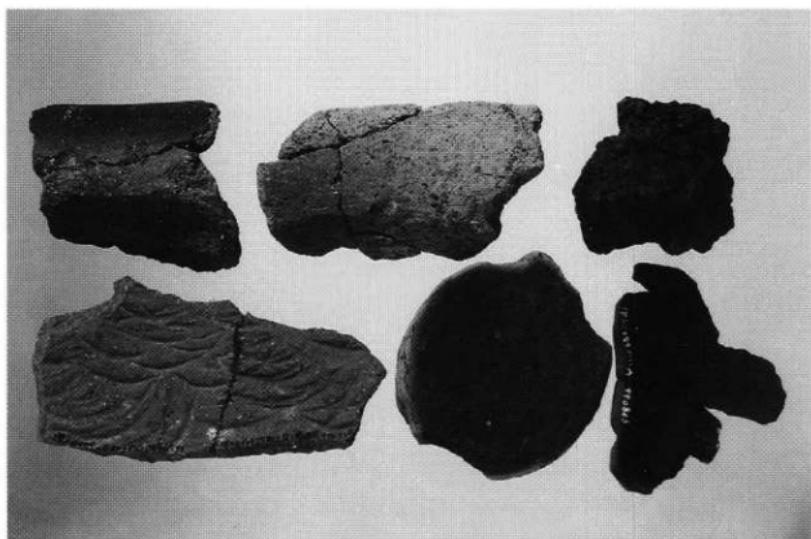


SB01 (北から)

図版 7



出土遺物（表）



出土遺物（裏）

報告書抄録

ふりがな	くけどだにいせき				
書名	潜戸谷遺跡				
副書名	能義第一地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書				
卷次					
シリーズ名	安来市埋蔵文化財調査報告				
シリーズ番号	第35集				
編集者名	金山尚志・水口晶郎				
編集機関	安来市教育委員会				
所在地	〒692-0011 島根県安来市安来町874-20 TEL 0854-22-2149				
発行年月日	西暦2000年3月31日				
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間
潜戸谷遺跡	島根県安来市 浜町字潜戸谷	32206	35°23'15"	133°14'40"	19990715 ~19990815
調査面積	潜戸谷遺跡 試掘調査	80m ² 152m ²	調査原因	圃場整備事業に伴う事前調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
潜戸谷遺跡	集落跡	古墳～ 平安時代	掘立柱建物跡	須恵器・土師器 鉄滓	舍人郷正倉推定地周辺に遺跡が広がっていることが判明した。
試掘調査	集落跡	弥生～ 歴史時代	柱穴	埴輪・須恵器 土師器・布目瓦	

安来市埋蔵文化財調査報告第35集

潜戸谷遺跡

能義第一地区県営担い手育成基盤事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2000年3月発行

発行 島根県松江農林振興センター

安来市教育委員会

印刷 (有)松浦印刷